

演題「当院におけるクロザリル[®]療法に対する薬剤師の役割」

演者 田畑佳祐

共同演者 横田哲子 田中豊樹 竹中直子 南野希 中山淳司 柴田博子

【目的】

クロザリル[®]（以下 CLZ）は治療抵抗性統合失調症に用いる薬剤であり、約 60%に改善が認められているが、無顆粒球症、痙攣、心筋症、高血糖、流涎等の副作用が発現するため、早期よりモニタリングを行い、安全に使用する必要がある。

近年、当院での CLZ 使用患者は増大し、薬剤師の責務も益々高まっている中、安全で効果的な CLZ 療法への取組みを行っているので報告する。

【方法】

〔院内体制の確立〕①クロザリル患者モニタリングサービス（以下 CPMS）にて CPMS 管理薬剤師及びコーディネータ資格取得②薬剤部・医局・外来への CPMS 基準や採血間隔、白血球・好中球低下時の対応について掲示・啓蒙③薬剤部内にて患者リスト・確認日・確認項目表作成し CPMS 規定に沿った血液検査確認の実施④入院患者への服薬指導・処方提案⑤医師からの相談応需・処方や CPMS 入力漏れへの対応⑥CPMS や CLZ の最新情報入手と院内周知

〔処方確認・提案調査〕2020 年 4 月～2021 年 7 月の CLZ 療法患者に対する薬剤師による処方・検査確認、処方提案内容を調査した。

【結果】

院内確認体制により、血液モニタリングによる無顆粒球症等重篤な副作用の早期発見だけでなく、薬剤切替え時の用量提案や便秘、流涎による 2 次肺炎への処方提案等を行うことができた。また、検査間隔の基準変更等の最新情報を医師と共有し、患者状態を踏まえた適切な検査間隔を提案できた。

調査では、副作用が維持量までの初期に発現している傾向があり、副作用等に対する処方提案等を 22 件行っていた。また、薬剤師による確認により、服用開始日又は日数変更の修正が 527 件中 43 件行われていた。

【考察】

CPMS の規定だけでなく院内確認体制を構築し、薬剤師による積極的な介入により、円滑かつ確実な副作用確認のもと CLZ 療法が実施できていると考える。今後は、更に外来患者の細かな状況把握にも努め、引き続き安全で効果的な CLZ 療法に寄与していきたい。